



《資料紹介》神戸市灘区篠原地区における昭和初期の古写真（論考・研究ノート・資料紹介・書評）

木村，修二

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 4(平成17年度事業報告書):135-152

(Issue Date)

2006-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002238>



(7)

論考・研究ノート・史料紹介・書評

《資料紹介》神戸市灘区篠原地区における昭和初期の古写真

木村 修二

こんにちの神戸市灘区篠原地区の区画は、戦前になされた篠原土地区画整理組合による区画整理事業がベースとなっている。同組合が正式に設立されたのは、大正14年（1925）6月のことである⁽¹⁾が、その3年前の大正11年に、後に組合長となる栗林耕平氏（当時六甲村助役）を中心に事業の発起がなされている。そのころ近隣の地区においてすでに耕地整理事業が始められつつあったことが発起の契機だったが、当初は地主の賛同をなかなか得られなかったという。

事業資金確保をいかに進めるかについても当初から難航し、耕地整理ではなく都市計画法に基づく土地区画整理として事業を進めざるを得なくなったため銀行による貸付が当時の銀行法上できないことになった。そこで関係者は、大正14年2月から銀行法の改正を求めて国会へ運動し、兵庫県選出代議士を伴って銀行法改正法案の国会提出を行なったが、翌年になってようやく両院を通過し、無事銀行法が改正され銀行よりの資金借入れが可能となった。こうして資金が確保され、工事請負業者も決定し、測量などの準備が着々と進められ、昭和3年（1928）4月記念すべき起工式を挙行了したのである。

工事は、区画整理・道路建設と六甲・杣谷両河川の改修とが二本柱として進められた。このうち、河川改修については、当初開渠式での護岸改修が予定されていたが、兵庫県当局の薦めなどもあって結局暗渠式による改修がなされることになった。河川改修工事は、昭和4年に完成しているが、区画整理工事はその後も続き、昭和10年頃にはほぼ完成するに至った。しかし同年6月末に発生した水害の影響もあって、正式な工事の完了は昭和12年2月にずれ込んでいる。篠原土地区画整理組合の事務作業が完了したのは、それからさらに4年後の昭和16年（1941）12月31日のことであった⁽²⁾。

こうした篠原土地区画整理組合の活動は、それまでの「階ノ如」き田畑が東西に「瀨望（ひろびろと望まれるさま）」⁽³⁾される農村風景から

「理想的郊外住宅地」⁽⁴⁾へと篠原地区を変貌させた。神戸大学文学部地域連携センターによる「神戸を中心とする文献資料所在確認調査」の遂行過程で、栗林耕平氏の子孫宅より篠原土地区画整理組合の関係資料とともに戦前の篠原地区の景観を撮影した写真が見出された。当然のことながらこれらの写真の存在は同組合の活動と切り離して考えることはできないだろう。つまり、写真の大半は、区画整理後における篠原地区の景観の現状を記録する目的で撮影されたものではないかということである。そのことは、写真の多くが、中央部に工事によって誕生した道路を配する構図のものが多くことにも顕れている。決して芸術性を銜ったものではないが、その記録性ゆえに、むしろ被写体となった当時の風景が、リアルな形で今日のわれわれの眼前に現れることになった。詳しくは個々の写真に付した解説文に譲るが、これらの写真をみると、意外に現在の街並みと変わらないものがある一方、やはり70年近い時の経過とともに大きく変貌した景観もみられる。現在篠原地区周辺に居住している人は、区画整理後の篠原しか知らない人がほとんどだろう。年配の方の中には、この写真が撮影された当時を記憶している人もいるかもしれないが、そんな方には懐かしく感じられるだろうし、また当時を知らない世代にとっては、自分たちの知る地区のすがたの原点をこれらの写真によって知ることになるだろう。

2006年3月に、これらの写真の一部を地域の方々に展示公開する機会を得た（「神戸市灘区との連携事業」参照）が、その際作成・配布した図録『古写真にみる篠原の昔と今』をここに転載し、紹介に代えたいと思う。

<註>

(1) 以下の記述は、「篠原土地区画整理事業経過概要」（昭和15年カ）、「篠原区画整理組合沿革抜萃」（昭和16年カ、いずれも栗林家文書）による。

(2) 篠原北町三丁目厳島神社境内「篠原整地記念」碑（昭和31年建立）の裏面碑文。

- (3) 明治16年（1883）「皇国地誌編纂取調書」
（若林泰氏収集文書）。
- (4) 前掲「篠原土地区画整理事業經過概要」。

篠原の昔と今

古写真にみる



神戸大学文学部地域連携センター編

まえがき

神戸市灘区篠原地区を中心とする地域は、大都市神戸のなかにあつて、地元には伝わった数多くの古文書などを通して中世にまでさかのぼる歴史をうかがい知ることのできるまことに稀有な土地柄です。

今回ご紹介する古写真の大部分は、大正14年（1925）に発足した篠原土地区画整理組合の組合長を務められた方のご子孫のお宅に伝えられていたもので、区画整理事業がほぼ完了をみた時点での現状を記録する目的で撮影されたものと考えられます。それだけに、写真そのものに芸術性がそなわっているわけではありませんが、そこに写しだされたのは当時の篠原地区のリアルな姿といえるでしょう。またその区画整理が現在の土地区画に直接つながるものだったので、70年近い時の経過を感じさせないような写真がある一方、もはや失われた景観が記録されている極めて貴重な写真もあります。

今回の調査は、神戸市灘区役所との地域連携事業の一つとして進めました。短い準備期間でしたので、古写真の撮影ポイント比定の調査が充分に行き届かない点もございましたが、今回の紹介によって現在の篠原地区の原点に思いをはせるきっかけになればと願っております。

最後になりましたが、貴重な写真をご提供いただいた方々をはじめ、調査にご協力いただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

神戸大学文学部地域連携センター

目次

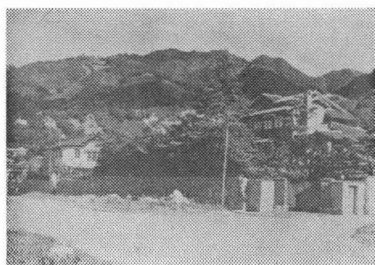
まえがき・目次	1
1 篠原北町二丁目付近	2
2 篠原本町五丁目付近	3
3 篠原中町一丁目付近	4
4 篠原中町三丁目付近	5
5 篠原中町六丁目付近	6
6 十二間道路	7
7 篠原南町付近の水道筋	8
8 六甲登山口	9
9 ホテル六甲ハウス	11
10 六甲尋常高等小学校	12
11 篠原橋の架橋式	13
12 都賀川上流の暗渠	14

本冊子の編集・執筆は、木村修二（神戸大学文学部地域連携研究員）が担当した。

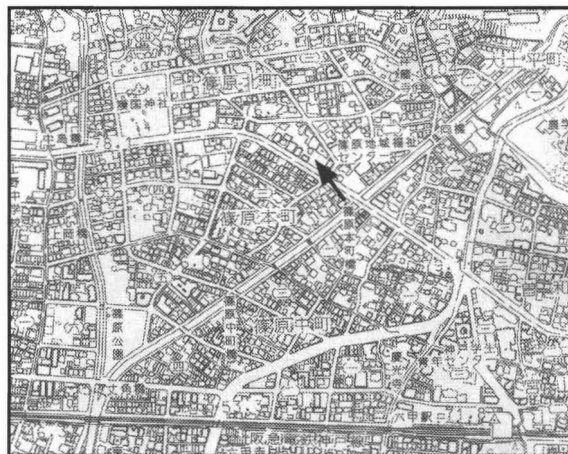


1 篠原北町二丁目付近

大正の終わり頃より始まった篠原の土地区画整理が契機となり、最も山寄りの篠原北町の辺りも宅地化が進んだ。写真は、六甲川にかかる篠原本町橋の少し西、現在の主要地方道山麓線（通称バス道）を通る神戸市バス「篠原本町二丁目」バス停のある辺りから摩耶山の方角へ向けて撮られた写真である。正面に見える屋敷は現存せず、篠原北町公園となっているが、道路に面した石垣は当時のままである。その向こう、現在の長峰台の高台あたりに洋館風の住宅がちらほらみられるが、長峰台は戦後大きく宅地造成され、神戸市立長峰中学校や、長峰霊園などが誕生した。



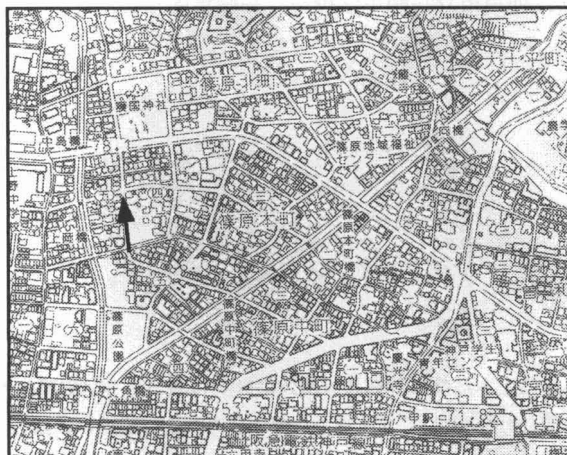
兵庫県土木部都市計画課『風致地区』（1943年）に「山麓住宅街の一部（神戸）」として掲載された篠原北町二丁目附近の景観





2 篠原本町五丁目付近

北方向を撮影。左側の赤レンガ塀の屋敷は赤レンガ風のタイル張りのビルに取って代わっているが、右手の石垣といい、正面に見える白い土塀といい、戦前の景観とそんなに変化していない。右手の石垣は戦前、栗村氏という邸宅の石垣だった。阪神大水害に際して、柚谷川、日柳川の氾濫に挟まれて逃げ場を失った近隣の住民がこの豪壮な屋敷に避難してきたが、栗村家でもこれを積極的に受入れたという(『篠原水害誌』)。この道の坂を上がっていくとやがてバス道(山麓線)に出て、交番のある護国神社の西側に出る。





3 篠原中町一丁目付近

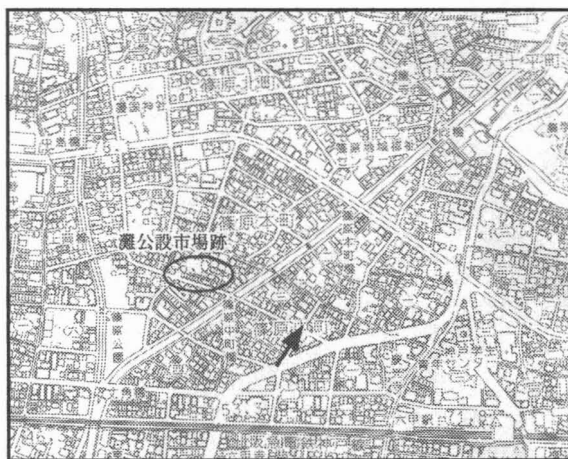
北方向を撮影。場所は、阪急六甲駅の改札を出て、駅の北に沿う道を西へ向かうとはじめて現れる交差点のあたりである。道路の右側は宮山町三丁目で、左側が篠原中町一丁目である。この道路を北へ進むと、六甲登山口の交差点に至り、南に向かうと六甲小学校の西側に出る。戦前には両側共に一戸建ての屋敷が続いているが、現在は3～5階建程度のマンションにすっかり取り囲まれ景観は一変した。それでも、右端を歩く女性の足元に見える低い石垣や、左側の單車脇の高い石垣は当時のままである。





4 篠原中町三丁目付近

通称十二間道路（後掲）より北に向いて撮られた写真。まず印象的なのは、右手に大きく写っている建物だが、これは「末広」というそば屋で、そば・うどんのほかには会席料理なども出していた。地区の役員会などもここでしばしば会合がもたれたという。正面に伸びる道路は、通称「篠原銀座」と呼ばれる商店街だった。往時を記憶する古老によれば、右（東）側の「末広」から北に向けて味噌屋、氷屋、八百屋、バス道だった道路を挟んで薬屋（東隣に引越屋）、散髪屋、うどん屋、郵便局（現存）、電器屋（のち水道屋）、たばこ屋があり、左（西）側には、写真にも見えるたばこ屋（現存）から、質屋、一杯呑み屋、洋服屋、パン（菓子）屋、道路を挟んで銀行（のち銭湯）、靴屋、下駄（修理）屋、ガラス屋（現存）、豆腐屋（通称「出店」といった店が並んでいたという。写真には「昼」と書かれた看板も見える。「篠原銀座」を横切る旧バス道を西へ行くと六甲川を渡ったあたりにかつて灘公設市場（昭和10年開設）があった。灘公設市場は、水道筋の商店街の発展に加え、阪神淡路大震災が直接の打撃となって廃止されてしまったが、「篠原銀座」より灘公設市場にかけては多くの商店が立ち並ぶ光景がかつては見られたのである。





5 篠原中町六丁目付近

篠原中町六丁目（右側）と畑原通一丁目の境をなす道路上に立って北方向を撮影したもの。写真には右手前、石造りの門の両脇に2枚の看板が掲げられているが、右側のものには「神戸市水道灘配水場」、左側は「神戸市水道灘配水場低層配水池」の文字が見える。現在でもなお右側のものだけが残っているが、文字は風化してしまいかなり工夫しないと読めない。配水池は、浄水場・ポンプ場における不測の事故に際しても直ちに断水にならないように貯水しておくところで、現在神戸市には123箇所ある（神戸市水道局HPより）。現在中央の道を北へ上がっていくと、バス道の脇との交差点あたりに灘中層排水池ポンプ場があり、さらに北へ向かうと灘高層配水場が所在している。

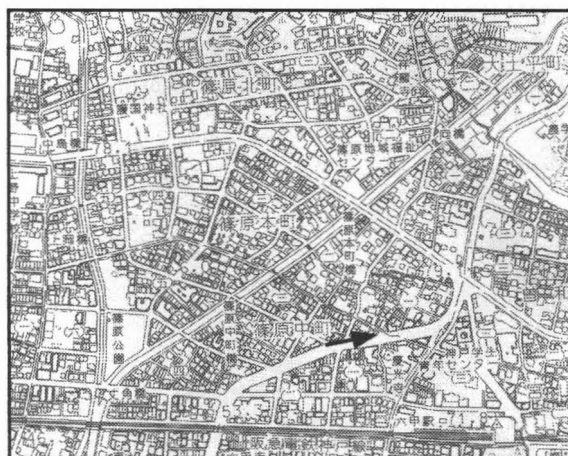




6 十二間道路

大正末より進められた篠原の土地区画整理によって誕生した道路である通称「十二間道路」は、篠原南町三丁目と四丁目の間から阪急の踏切を経て、篠原中町一丁目・二丁目の区画と同三丁目・四丁目の区画の境をなすように北東方向へ延び、六甲登山口の交差点へ至る道路である。現在は道路の両脇にマンションが立ち並び空が狭くなった。

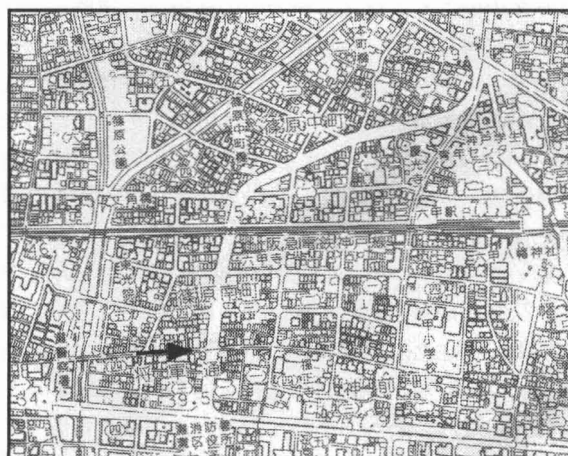
写真の奥にバスが走っているのがみえるが、かつては阪急六甲駅前から六甲登山口を経てこの十二間道路を通り、写真の手前あたりから十二間道路を離れ西にむかい、中町三丁目を横切り六甲川・杣谷川を渡って青谷方面へ向かうルートをとっていた。





7 篠原南町付近の水道筋

水道筋は、阪急とJRの間を山手幹線道路に沿うように東西に伸びる道路だが、現在都賀川の西側から阪急王子公園駅付近まで多くの店が並ぶ商店街をなしている。しかし、この写真は、都賀川の東側、篠原南町の南端と將軍通との境附近を東に向けて撮影されたものである。現在も少しは商店があるが、往時の賑わいぶりを想像することはかなり難しい。写真には「甲南ラヂオ」や「さんば古川」「高砂水」などの看板がみえ時代を感じさせる。道では割ぼう着姿のおばちゃんたちが買い物かごを手に行きかたり、井戸端会議をしたり、子供達が駆け回ったりと、のどかな夕方の光景である。



8 六甲登山口

阪急六甲駅を降り山の方（北西方向）へ向かって300メートルほどゆるい坂をあがっていくと、5つの道路が交わる広い交差点に出る。ここが「六甲登山口」と呼ばれる交差点である。

写真には十二間道路より阪急六甲駅に向かおうとするバスが大きく写って、この写真を印象深いものにしている。このバスは、六甲駅から六甲登山口、十二間道路、篠原中町、上野中学校前を経て、青谷方面へ向かう神戸市バスで、現在の神戸市バス2系統（阪急六甲―三宮神社間）のほぼ前身をなしていた。このバスの車両はいわゆる木炭バスで、神戸市バスでは昭和12年（1937）頃より導入されている。

木炭バスは、厳密には「代燃車」といい、物資の乏しくなった戦前にガソリン車に代わって全国的に導入されている。カシやナラ、クヌギなどの堅い木材を4センチ角×6センチ程度に小切りにし、それをバス後部に設えられたガス発生炉（カマ）でいったん炭化させた上でガスを発生させ、不純物を取り除く分離器やガス冷却器、ガス清浄器などの装置を経てエンジンを回転させていた（神奈川中央交通HPより）。どうしても馬力が弱く、急な坂道などでは乗客らがバスから降り、力を合わせてバスを押すといったようなのかな光景も見られたという（篠原の古老談）。

バスの右側の白い建物は巡査派出所で、戦後になって山麓線沿いの神戸護国神社の傍らに移転するまで、この六甲登山口の一角に所在していた。

写真の中央部に白い看板を掲げる商店が見えるが、看板には「六甲スキー餅」と見える。どのような餅だったのか今回調べあげることができなかったが、六甲山上のスキー場が開かれたのを記念して作られたものか。登山客はもちろん山上のゴルフ場やスキー場へ向かう多くの人々がこの六甲登山口交差点を通過して行き、六甲ケーブルや六甲ロープウェイ（戦時中に撤去）、表六甲ドライブウェイを利用して六甲山上へ向かったのである。

派出所とバスの間からわずかに「大日本芸術研究所」の看板が見えるが、ここではもっぱら日本舞踊などの稽古が行われていたらしい。

バスの向こうに見える建設中の建物は、道路が拡幅されたために現存しない。現在はその北側にイエズス会日本管区の六甲カトリック教会が所在し、その鐘楼が新たな六甲登山口の風景を構成している。その傍らの電柱に「曾和旅館」と書かれた看板がみえる。また派出所脇の電柱にも「旅館月乃里」の広告がみえ、この周辺にいくつかの旅館があったことが知られる。

影の方向からみて夕方近くに撮影されたものとみえるが、駅方面から上がってきた神戸商大生や、写真に写るバスに乗ってきたものか山の方へ帰ってゆく人が見える。道路上には石材などの資材やそれを運ぶ荷馬車が見えるが、山麓線の建設工事かあるいは阪神大水害後の復興工事だろ

うか。

画面の中央に山の方へ向かう道が延びるが、その延長上に高い煙突を持つ白く光る屋根の建物が見える。これは別に掲げるホテル六甲ハウスの建物である。そのさらに向こうには、現在は削り取られて消滅した勝岡山の山容が見える。勝岡山の跡は現在マンション（六甲グランドヒルズ）や神戸松蔭女子学院大学の敷地となっている。

なお往時を知る人によれば撮影者の立っている交差点の一角には、六甲山の登山客を当てにした茶屋があったという。谷崎潤一郎の小説「猫と庄造と二人のおんな」（昭和9年）のなかで、主人公庄造がリリーという猫に会うために、芦屋からわざわざ自転車で六甲登山口までやってくるというくだりがあるが、庄造はこの六甲登山口の「角の休み茶屋」に自転車を預けてリリーのいる「二三丁上にある目的の家の方へ」向かっている。この「角の休み茶屋」とはあるいはこの登山客目当ての茶屋のことかもしれない、もし仮にそうだとしたら谷崎もこのあたりまでロケハンに来ていた可能性がある。

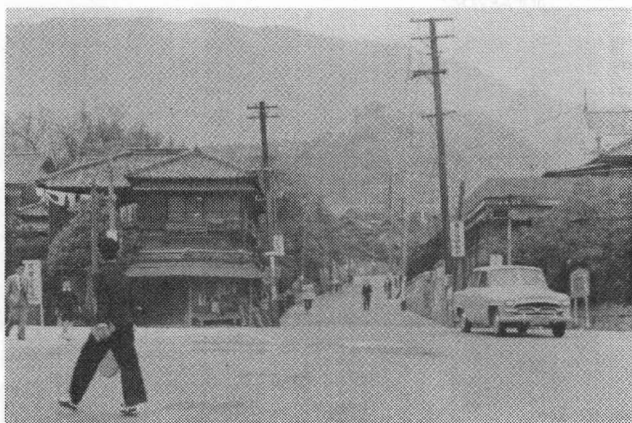
また、残念ながら写真には写っていないが、写真左手の方の六甲登山口交差点西南角には、昭和9年（1934）開店の喫茶・洋食の店「エクラン」があった。昭和9年当時この阪急より北側の六甲登山口周辺は、風致地区・文教地区であるとの理由から飲食店の開店が大きく制限されていたが、「エクランのママ」として知られた広瀬茂子さんの当局への再三にわたる交渉の結果、あくまで学生を相手に「自分の家の応接間に客人を迎えるような気持ちで商売をし」「決して他人を使わないで家族だけでやりなさい」という条件で店の開店が認められたという（広瀬茂子「六甲山と神戸大学さんをながめて五十年」『エクラン50年』）。以来、阪神淡路大震災による全壊指定・解体と2年後の再建そして引退までの60数年間、この六甲登山口の地で、「エクラン」と広瀬ママは実に多くの神戸大学学生の空腹を満足させる幾星霜を送ったのである。



「エクラン」と広瀬茂子さん（1986年頃）
（『エクラン50年』より）



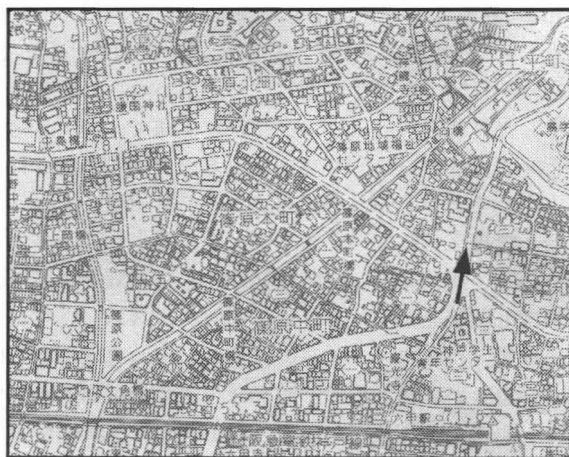
昭和15年（1940）頃の六甲登山口

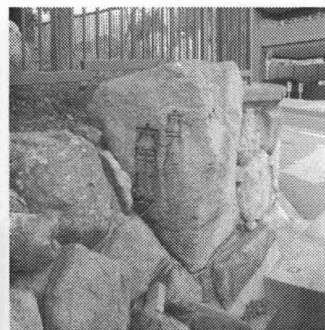


昭和28年（1953）頃の六甲登山口（『エ克蘭』より）



現在（2006年2月）の六甲登山口





位置づけることは可能だろう。

今回紹介する写真(左)は、六甲登山口交差点から六甲ケーブル駅方面へ向かう道路より撮影したホテル営業当時の貴重な写真。誕生より数年を経て、敷地の樹木もかなり成長してきた。建物は取り壊されて現存しないが、写真にみ

える石の表示(上右)と樹木などは現存している。道路(主要地方道神戸六甲線)は拡幅されて、現在(下)では鶴甲団地行きバスやマイカーが多く行き交い交通量は非常に多い。また神戸大学や神戸松蔭女子学院大学、六甲学院の学生の通学路ともなっているが、写真当時も神戸商業大学(神戸大学の前身)の学生が通う主要道路だった。

9 ホテル六甲ハウス

ホテル六甲ハウスは篠原北町一丁目に昭和13年(1938)の夏に誕生したホテルである。現在、六甲登山口の交差点より山のほうへゆるい坂を約200メートル進んだ左手に、六甲学院生徒研修所および「ザビエルハウス」と呼ばれるイエズス会の施設があるが、そこに「ホテル六甲ハウス」は建てられていた。ホテル自体は、おそらく戦時中に営業をやめ、建物は明治4年(1871)以来の歴史を持つ「万国病院」の所有に帰し、昭和37年(1962)ころまで病院として続くが、この年より「六甲会館」と呼ばれるようになる。「六甲会館」では、学生寮のほか語学学校などにも使用されたようだが、それも昭和52年(1977)に閉寮となり、昭和60年(1985)年ころまでに老朽化のためか取り壊されている(植村達男『神戸の本棚』)。

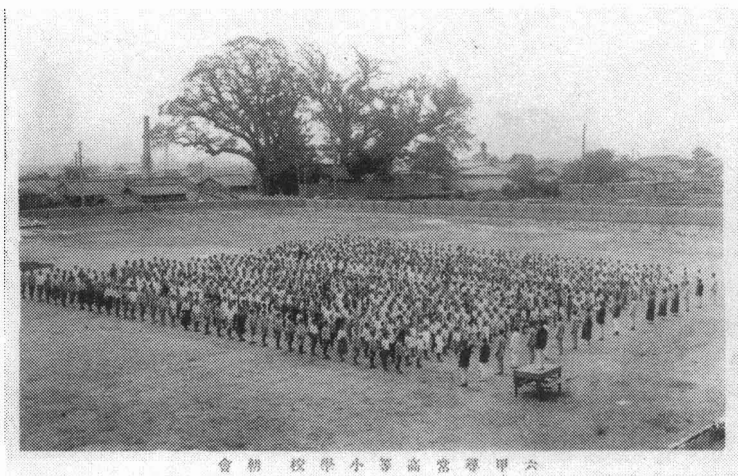
このホテルは、建物の南側に聳える四角い煙突が印象的な洋館風の木造三階建ての主屋を中心に構成され、客室は和室6室を含んで39室あったという。また、大小数室の食堂をそなえ、宴会や集会から家族の食事まで対応していた。当時、近隣の居住者のうちこの六甲ハウスの食堂で、食事をした経験を持つ人はかなりいた模様で、今でもその時のディナーメニューやパンフレットを大切に所持されている人もいる。当時の六甲周辺にあつては相当ハイカラなイメージで捉えられていたのではないだろうか。

最近、明治末期から昭和初期にかけて阪神地域において展開した新しい文化を「阪神間モダニズム」と呼んで、芸術運動、ライフスタイルの側面から追及し展示会を催すなどの動きがみられたが、昭和13年誕生の「ホテル六甲ハウス」も、最末期ながら「阪神間モダニズム」の潮流の中に





六甲尋常高等小学校校舎



六甲尋常高等小学校朝会



10 六甲尋常高等小学校

六甲尋常高等小学校は、明治19年（1886）八幡村梅仙寺に八幡小学校として開設されたのを直接の淵源とする。その後明治26年（1893）に八幡村内の常地免という場所に校舎が新築され、篠原の子供たちもこの八幡小学校へ通うようになる。さらに大正末年より現在の地に新校舎が建設され、昭和2年（1927）に本館の第一期工事が完成している。工事はさらに昭和11年（1936）の第二期工事完成、翌12年の第二期工事の完成によって、新校舎が落成している。

この度の調査の過程で、校舎の落成を記念して製作された珍しい絵葉書が見いだされた。前の校舎を記憶している方もまだまだ多いと思われるが、完成したての真新しい校舎や校庭での朝会、講堂の内部、教具室と廊下、作法教室と地歴教室といった各施設の写真が5枚一組となっている（外に葉書があったのかは不明）。

平成3年（1991）に現在の校舎が竣工しているが、改築されて現存しない校舎はともかく、昔も今も校庭で開かれている朝会（現在は毎週月曜の朝八時半より）の様子を現在と引き比べて驚かされるのは、なんといっても児童数の差であろう。地方で過疎・高齢化が言われるようになって久

しくなったが、現代の“少子化”という事態は、都市部においても小学校朝会の今昔の写真を比べることで目に見える形で実感させられる。

写真には、六甲小学校の南西に位置する春日神社の二本の大楠「神前の楠」（樹齢1000年）の神々しいまでの姿が印象深く配されている。しかし、現在この内の写真左手の木は根本より数メートルの所から切られて残念ながら無くなっている。古写真は小学校周辺の景観の変化をも余すところなく伝えているのである。



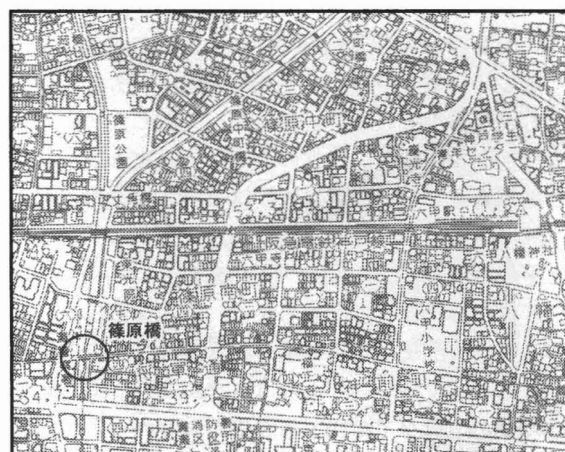


11 篠原橋の架橋式

水道筋が都賀川に交わる所にかかる篠原橋が再建された際の式典の様相(上)。左岸(東)から右岸方向を撮影したもので、祭壇は東面して据えられ神官が祝詞をあげる中、要人は右岸側に参列している。右岸側は、現在の風景と比べるとやはり70年近い時の経過を思わずにはいられない。画面右側のテントの向こうの広場には、式典のあと渡り初めをする児童が待機しているのが見える。

架橋式のあと、関係者による橋の渡り初めが行なわれた(下)。写真は、都賀川左岸の南側から北方に向けて撮影されたもので、神官を先頭に小学生児童らが右岸から左岸に向かって渡る様子が写されている。川幅の長さで川床の深さに現在とは大きな差がある。写真には、川の上流方面に阪急のガードがみえるほか、六甲～摩耶山の山容が一望でき、摩耶山上の軍艦ホテルと摩耶山ホテルも遠望できる。摩耶山ホテルの南面は、阪神大水害によって大きく崩落し

たが、この写真からもホテル直下の山肌が大きく削り取られている様子を見てとることができる。





六甲川の暗渠工事（合流点付近）



暗渠工事の様子（柚谷川？）

12 都賀川上流の暗渠

都賀川流域のうち阪急ガード北の合流点より上流部の六甲川・柚谷川が阪神大水害の時まで暗渠であったことを知っている人は少なくなった。

両川は、普段は水量の少ない川であったが、雨期には出水を引き起こすのが常であったという。両川の護岸改修は流域住民の念願だったといえよう。大正12年(1923)より始まった篠原土地区画整理事業の一環で都賀川上流部の護岸改修が計画されることになった。工事にあたっては、当初開渠式の計画がなされていたが、「風致、衛生、土地利用、交通の便利、地域総体の地形、増水における交通の危険等」（「篠原水害誌」）を議論のすえ兵庫県監督官の指導のもと暗渠式で工事に着手、昭和4年に一応完成を見た。

ところが、昭和7年（1932）7月豪雨に伴う出水が発生し、岩石、土砂、流木が一気に暗渠に流入し、暗渠の一部を破損させた。さらに昭和10年(1935)6月の大豪雨では、

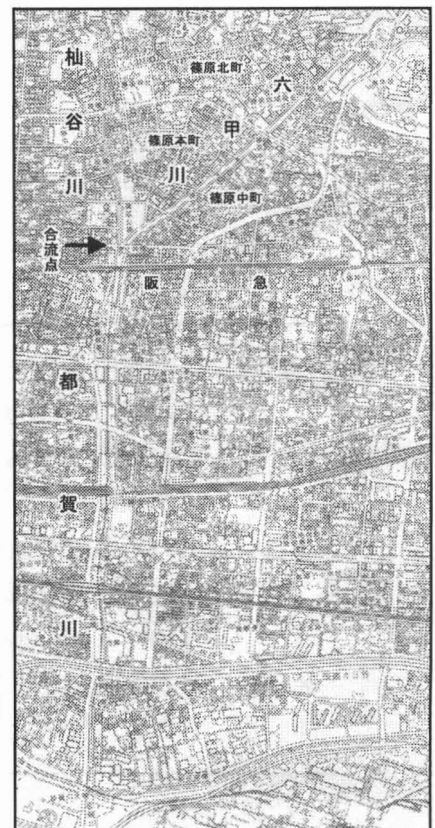


前回以上の障害物が暗渠に流入し、破損や陥没を引き起こした。

この時点で、篠原土地区画整理組合を始めとする住民側は、兵庫県、神戸市、神戸市灘区、兵庫県警に対して、復旧の助力を求める陳情書を同年7月に提出したが、結局のところ岩石や土砂の発生源である暗渠よりさらに上流部の改修がなされるにとどまった。そうしたところへ昭和13年7月阪神地方に集中豪雨が襲い、阪神間の川が悉く大氾濫を引き起こした。相変わらず暗渠を持っていた都賀川は流域全体に未曾有の被害をもたらすことになったのである。

復旧工事に当たっては、都賀川上流部の六甲・柚谷両川もようやく開渠式の護岸工事がなされている。

今回紹介する写真は六甲川・柚谷川において進められつつあった暗渠工事を記録したものである。各写真をみて驚かされるのは、暗渠の水路部分が意外な程小さいことで、いくら普段水量が乏しいといっても、いざ増水となったときに上流からの大量の流水を通すことが素人目にも困難なように思える。実際の水害の時には水だけではなく、岩石や土砂、流木といった障害物が流入し、さらに水の流れをせき止めることになる。現在の六甲川・柚谷川は、護岸もかなり深くとられ、川というよりほとんど溝のような景観をなしているが、水害への対策としてはいちおう過去の失敗を踏まえているとはいえるのかもしれない。



古写真にみる篠原の昔と今

発行日 平成 18 年（2006）3 月 1 日

編 集 神戸大学文学部地域連携センター

〒 657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1

TEL & FAX : 078-803-5566

E-mail : area-c@lit.kobe-u.ac.jp

URL : <http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~area-c/welcome.html>

発 行 灘百選の会

印 刷 神戸カム株式会社
